

2008年

9月20日（土曜日） - 新しい可能性への灯（ともしび） -

本日、丹後町で「間人（はしうど）こころ灯籠祭」があった。丹後町の商工会青年部の若手有志の皆さんを中心に実行委員会を創られて昨年からの時期に実施されているお祭りだ。灯籠で街中路傍を照らしたり川に浮かべたりとともに代表的な観光資源である「立岩」を灯火で照らす。勇壮な立岩が灯の光で浮かび上がる姿は幻想的な美しさですが、私は、それとともに何より、灯の光の中に重なって映える、灯に籠められた主催者の皆さん、住民の皆さんの地域を想う真剣な思いの輝きこそが、目には見えませんが、これからのまちづくりに求められる本物の魅力、人を惹きつける引力となるものであると感じています。

このお祭りのところは、私なりに大きく二つ受け止めています。一つは、この立岩には今も大江山鬼伝説の鬼様が追い籠められ封じ込められているという中世からの伝説が伝えられていますが、中に鬼が封ぜられている岩に光をあてるということは、象徴的には、一旦、人から追いやられたものに改めて再発見の光をあてるということであり、あたかも一見不明で捨てられかねない黒い原石にダイヤモンドを発見するような尊い作業のように映り、このことは、何ごとの中にも喜びを発見しひとの人生やまちづくりをますます豊かなものにしていくとても大切なことであるに違いありません。

そして何より素晴らしく思いますのは、この祭りを企画実行されこれからの本市の将来を大きく開いていく若者たちが、次世代の子どもたちの未来の豊かさのためへと、身近な素晴らしい地域資源の魅力をより一層磨きあげて、子どもたちにつないでいきたいという真剣な願いを籠めて、そのためには「まず一人ひとりが行動を起こそう。新しい可能性を開いていこう。」という、若者たちの身を挺（てい）するように突き進む姿勢とそれを支える真摯でまぶしいような情熱であります。この輝きこそが、このお祭りから洩れさしてくる、人を惹きつける強い光となっていくと信じています。

本年度で2回目のお祭りですが、この祭りとこの祭りに籠められた地域の繁栄を願う本物のところが本市のまちづくりとひとづくりを今後広くリードされ、本市のますますの繁栄と後世代の子どもたちの末広がりやの弥栄が導かれますよう心から祈り、信じています。